

「ディープスカイ(深宇宙)の世界」

桑田 直宏

天文ファンと言っても、人によって好きな分野はさまざまです。惑星が大好きな人、彗星を追っかける人、天体写真撮影にのめりこむ人などいろいろであり、星なかまひめじのメンバーも同様です。私は好きなのは、その中でもちょっとマイナーなディープスカイ観望です。ディープスカイと聞くだけで今でもワクワクしてきます。

きっかけは、学校の図書館でたまたま見た「パロマ天文台天体写真」でした。そこには見たこともない世界が広がっていたのです。鮮明な月のクレーター、木星の模様、土星の輪、無数の恒星が集まる大球状星団など、ページをめくるたびに目が釘付けになっていきました。そして一番自分にとって驚いたのが深宇宙の写真だったのです。

アンドロメダ大星雲や大きな渦を巻いている星雲、そしてもっと遠く何億光年も先に広がる無数の系外星雲の写真を目にしたときの驚きは今でもよく覚えています。当時の私は望遠鏡の知識もなかったので、たいていの方がそう思うように、小さな望遠鏡でもあの写真のように見えると思っていました。

高校1年の時に高橋製作所の5センチ屈折望遠鏡を買いましたが、そのころにはそのようには見えないことは理解していました。

社会人になって再び天文に興味が出てきたとき、インターネットで情報を取れるようになっていました。そしてあこがれていた深宇宙の系外星雲がアマチュアが買える望遠鏡を使って肉眼で見えることを知って驚いたのです。大学までは天文に熱中していましたが、当時はハイアマチュアの屈折望遠鏡は10センチ、反射望遠鏡なら15センチが最大で、あのパロマ天文台の深宇宙の系外なんて見えるはずがありません。

しかし時代が変わりました。30センチとか40センチの大口径の反射望遠鏡が安く手に入るようになり、接眼鏡も広視界になり、自動導入によって視野の真ん中に暗い天体を入れることが可能になったのです。

別荘の40センチを使って暗い系外星雲を中心に観望するようになっていくつか気づいたことがあります。空が暗いことや透明度がいいことはもちろん大事なことなのですが、シーイングもかなり見え方に影響してくるのです。40センチの常用倍率は160倍と240倍です。この倍率は惑星観望でもシーイングに大いに左右されます。年に数回程度ですが、透明度もシーイングもいいという日

があります。そのときには今まで見えなかった天体に気が付いたり、より鮮明に天体が見えるのです。

事前の予習も大事です。ステラナビや写真でその天体がどのように見えるかを調べておくことも大事です。そしてこのあたりに見えるはずだと確信して目をこらしたりそらし目を使ったりしていくと、あら不思議、見えてくるのです。

また、天体の等級もあまりあてにならないこともわかりました。12 等級でも見えづらいのもあれば、15 等級でも明るく見えるものもあります。メシエ 81 と 82 を考えていただければわかりますが、系外の場合、真横になっている天体が見やすいのです。

40 センチのディープスカイ観望を初めて 8 年目に入りました。たいていの系外は見てきました。数えてはいませんが、2 千とか 3 千はいつていると思います。今後はさらにディープな天体に挑戦したいのですが、いかんせん自分の目が曇ってきました。ここ数年で好きなものは「天体写真の世界」に変わるかも。